

京都市の小中一貫教育

京都市教育委員会 学校指導課
清水康一

- 1 はじめに
- 2 京都市の小中一貫教育の歩み
- 3 京都市の考える小中一貫教育
- 4 5つの視点
- 5 実施形態
- 6 施設一体型
(東山開晴館, 凌風学園, 大原学院, 施設一体型あれこれ)
- 7 京都市学習支援プログラム

1 はじめに

70の中学校ブロックにおいて

京都市立の学校数は、**275校園**（平成24年度）

園児・児童・生徒数は、105,083人（平成23年度）

・幼稚園 16園 [園児数： 1,026人]

・**小学校 170校 [児童数： 65,659人]**

・**中学校 73校 [生徒数： 31,157人]**

・高等学校： 9校 [生徒数： 6,221人]

・総合支援学校： 7校 [児童生徒数：1,020人]

政令指定都市の市立学校として実施

「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」により、政令指定都市が行う事務

・府(県)費負担教職員の任免、給与の決定、休職及び懲戒に関する事務

→【市立学校の教職員の人事】

1 はじめに

京都市の教育改革の柱として・・・

横の連携→地域・保護者に関われた学校づくり
学校評価, 学校評議員, 学校運営協議会

縦の連携→校種間での開かれた学校づくり
保幼小中連携, 中高接続
小中一貫教育

2 京都市の小中一貫教育の歩み

- ◆小中一貫教育特区認定(4中学校区)【平成16～19年】
- ◆全小中学校に小中連携主任を設置【平成16年】
- ◆小中一貫教育全国サミット2007in京都【平成19年8月】
- ◆小中一貫教育を全行政区へ展開【平成20年】
- ◆小中一貫教育を全中学校ブロックへ展開【平成23年】
- ◆小中一貫教育全国サミット2013in京都【平成25年1月】

3 京都市の考える小中一貫教育

「学び」と「育ち」の連続性を大切にする。

子どもを中心にした学校間の滑らかな接続。

全ての小・中学校で取り組む。

3 京都市の考える小中一貫教育

小中一貫教育は、そのこと自体が目的ではない。「中1ギャップ」や、子どもたちの心身の発達の早期化などに対応しつつ、子どもたちの生きる力を育てていくための「システム」「仕組み」である。

小学校と中学校が、子どもにまつわる情報を共有して、学びと育ちを義務教育9年間の枠でとらえ直し、互いの教育活動を改善していくことが重要。地域と一体となって取組み、子どもたちの能力を引き出していく。

4 5つの視点

I.小中一貫共通目標

- ・小中学校で目指す子ども像を共有し，子どもたちの「生きる力」の育成を図る。

II.教育課程/指導形態 の工夫・改善

- ・教育課程（カリキュラム）の編成や指導形態などの工夫・改善を図り，「確かな学力」の育成を目指す。

III.教育活動の連続性

- ・子どもたちの教育活動の連続性を高める。

IV.教職員間の連携・協働

- ・小中学校の教職員間の「連携」と「協働」を深める。

V.家庭・地域との連携・ 協力

- ・家庭や地域との「連携」「協力」をより一層推進する。

5 実施形態

◆施設一体型

- ・小中学校が同一施設, 同一敷地内
にあることを活用した小中一貫教育



凌風学園の新校舎

- ・花背小中学校【平成19年度】
- ・京都大原学院【平成21年度】
- ・東山開晴館 【平成23年度】
- ・凌風学園 【平成24年度】

【学年区分】
4・3・2制

5 実施形態

◆施設併用型

- ・小中学校の施設などが独立しながらも、児童・生徒が柔軟に相互の校舎を活用した小中一貫教育。



保育所, デイサービス, 商業施設等との複合施設の京都御池中学校の校舎で小学校6年生が中学生と学ぶ。

- ・京都御池中学校【平成19年度】 **【学年区分】5・4制**
- ・東山南部小・中学校【平成26年度開校予定】

5 実施形態

◆連携型

- ・小・中学校の施設などが独立しながらも、教員と地域の緊密な連携による小中一貫教育。



小中合同の学校運営協議会の指定

※施設一体・併用型以外の**全ての**小学校を有する
中学校ブロック。

6 開晴小中学校(東山開晴館)

【児童生徒数 874名】



敷地面積: 約14,500㎡
構造: 鉄筋コンクリート造
階数: 地上3階/地下2階
高さ: 15m
延床面積: 約14,600㎡

6 開晴小中学校(東山開晴館)

1 階

玄関, 教室, オープンスペース, 校長室,
職員室, 保健室, 相談室, 放送室, 会議室,
PTA室等

2 階

教室, 理科室, コンピュータ室, 図書室,
多目的ルーム, オープンスペース, 相談室等

3 階

教室, 小教室, 理科室, 被服室,
コンピュータ室, 図書室, 相談室等

地下1階

音楽室, 調理室, ランチルーム, 給食室等

地下2階

第1体育館, 武道場等



※隣接の元六原小学校敷地に建設を予定している六原学舎の施設内容
技術室, 図工室, 美術室, 地域交流ルーム, 和室, 第二体育館,
プール, グラウンド

6 開晴小中学校：施設面での特徴

【9学年が共に学ぶ，明るくゆとりある学習空間】

- ・教室はほとんどが南面採光で明るく，8m×8.5mのゆとりある広さを確保。
- ・中庭を小学生低学年が安心して活動できる空間とすると共に，地下1階のランチルーム前にも一体利用が可能な専用庭を設置。
- ・グラウンドと体育館は元洛東中学校と元六原小学校の両敷地に整備し，運動スペースを確保。

6 開晴学校：施設面での特徴など

【安心・安全・快適な校内環境・学習環境の確保】

- ・玄関を見渡せる位置に小中一体の職員室を配置。
- ・全ての教室に空調設備を設置。
- ・図書室とコンピュータ室を一体化させるとともに、無線LAN機能を備えた2～3階吹き抜けの開放的な「メディアセンター」として整備。
- ・多様な学習形態に対応可能な空間。
- ・オープンスペースや少人数教室を確保。

6 凌風小中学校(凌風学園)

【児童生徒数 787名】



敷地面積:約13,539㎡

構造:鉄筋コンクリート造

階数:地上6階

高さ:25m

延床面積:約16,063㎡

6 凌風小中学校(凌風学園)



1 階:

玄関, 教室, オープンスペース, 校長室, 職員室, 保健室, 放送室, PTA室, 地域交流室, 小体育館, 給食室, 光と風の庭等

2 階:

教室, 理科室, 調理室, 被服室, ランチルーム, 図書コーナー, 武道場等

3 階:

教室, コンピュータ室, 図書室, 大体育館等

4 階:

教室, 美術室, 技術クラフト室等

5 階:

音楽室, 理科室, 和室, 屋上テラス等

※現在, 元陶化中学校校舎を解体しており, 今後, 同敷地にプール棟, グラウンド, プレイゾーン等を整備する。また, 隣接する元東和小学校敷地(東和校地)に第二グラウンドを整備する。

6 凌風小中学校：施設面での特徴

【9学年が共に学ぶ，明るくゆとりある学習空間】

- ・9学年すべての普通教室を校舎南側に配置。
- ・8×9mのゆとりある普通教室，将来的な児童生徒増にも対応できる多目的教室を配置。
- ・学年単位の集会や学習発表等の多様な教育活動に利用できるオープンスペースを配置。
- ・校舎南側に大きく開かれた眺望の良い空間を生かして，5階南側に様々な学習活動や交流の場として活用できる広いバルコニーを設置。

6 凌風小中学校：施設面での特徴

【安心・安全・快適な校内環境】

- ・職員室は、北側玄関と南側グラウンド(整備予定)の両方を見渡せる位置に配置。
- ・施設中央に吹き抜けの中庭(「光と風の庭」)を配置し、採光・通風を確保。
- ・全ての教室に空調を設置。

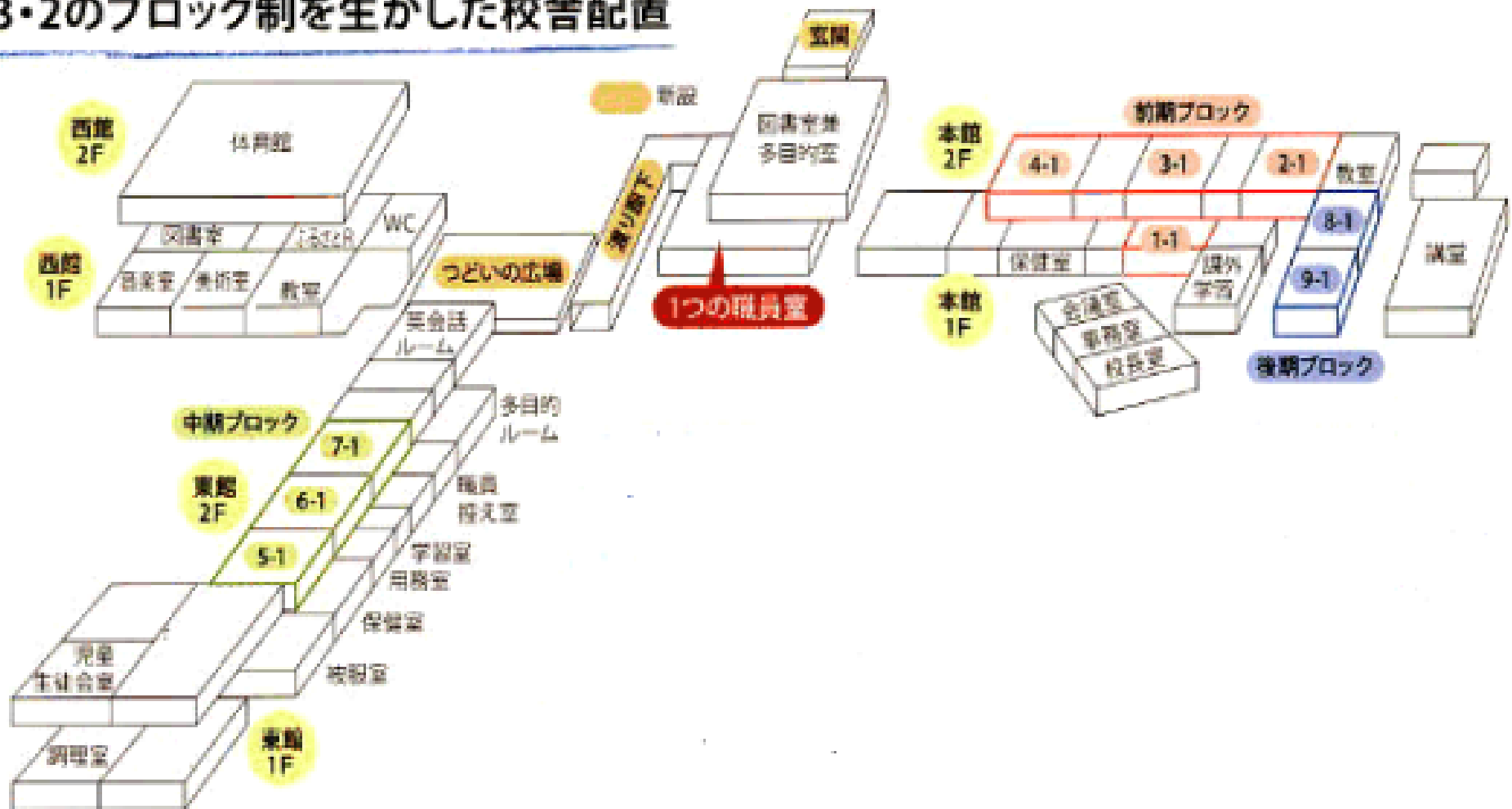
6 凌風小中学校：施設面での特徴

【地域の防災拠点としての学校】

- ・避難所や情報発信所としての機能を整備。
- ・大体育館(3F)：約900m²，ガスストーブ用ガスコック
- ・小体育館(1F)：約700m²
- ・武道場(2F)：約260m²，空調整備，畳敷き
- ・非常用発電設備，太陽光発電装置(10kw)，
防災情報システム装置

6 大原小中学校(京都大原学院)

4・3・2のブロック制を生かした校舎配置



6 大原小中学校（京都大原学院）

- ・ 3つのブロックを、「前期・後期」と「中期」という二つの校舎に分けていることにより、ブロック間の進級時に、「校舎を替わる」ことになり、子どもの成長を促す効果がある。
- ・ 前期と後期の児童生徒が同じ校舎にすることで、前期児童は手本を間近に見ることができ、後期生徒には、年少者に見られていることで、成長を促す効果がある。

6 大原小中学校（京都大原学院）

・中期ブロックは、5・6・7年という小・中学生，担当教師が入り交じった状態であるため、今までにない新しいことができるという興味・意欲が教師側にも湧きやすい。

・職員室を小中一緒にすることで、情報交換やお互いの思いを共有しやすい。

小中の文化の壁を取り除き、小中全員で子どもたちを見守れるという効果あり。

6 施設一体型あれこれ

- 学校規模の限界
- 学年配置, 普通教室の配置
- 登校時の児童生徒の動線
- **職員室の一体化**は必須？
- 図書室, 保健室は一つでも良い？

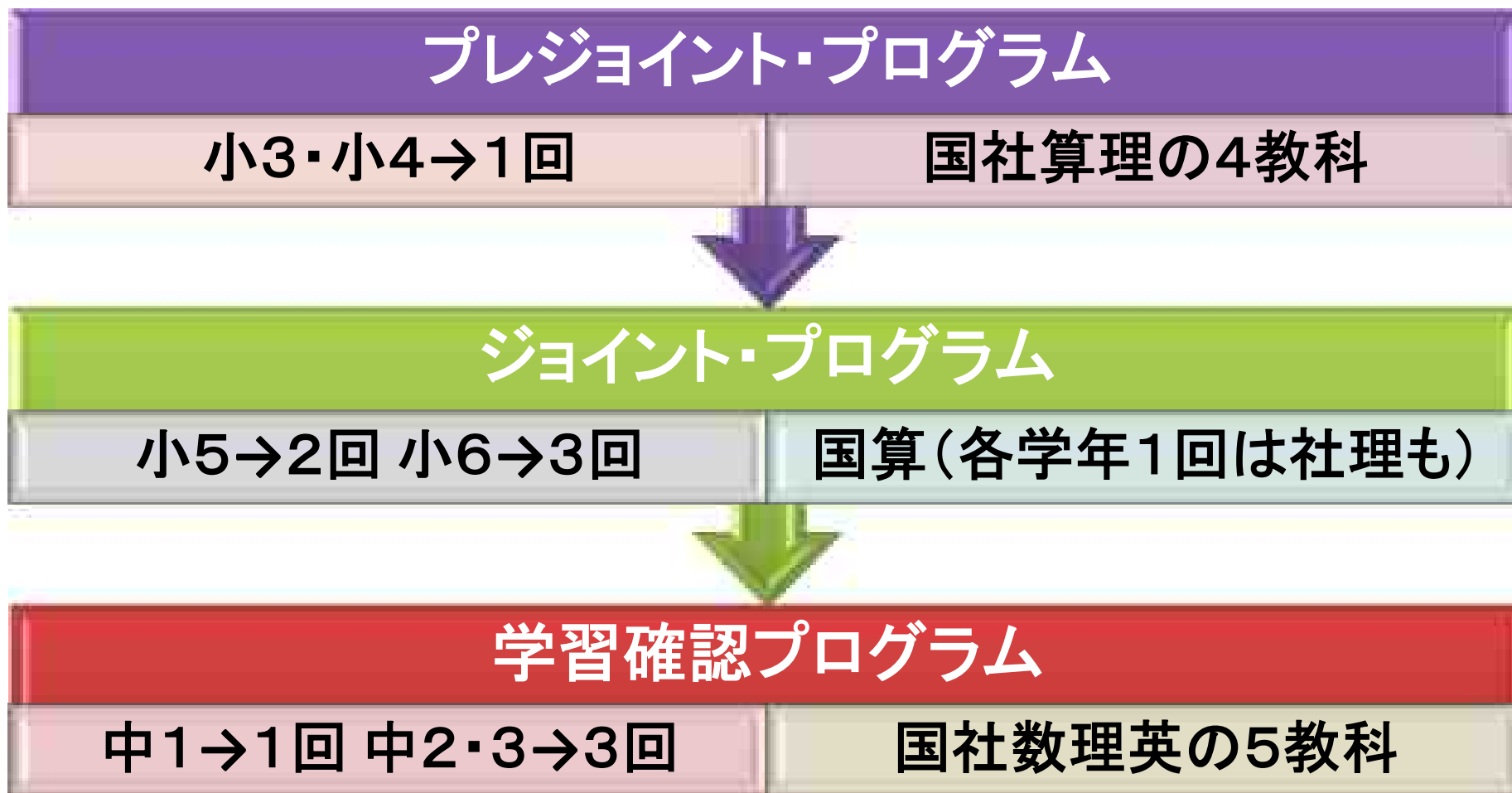
7 京都市学習支援プログラム

◆内容

- ・市立小中学校の校長会が主体となって教科研究会，教育委員会，外部専門機関が協力
- ・小中一貫した系統的・継続的な学習を支援する京都市独自のプログラム
- ・豊富な復習教材や個人帳票などを活用した繰り返し学習で，**復習，確認，補充の学習サイクル**をシステム化
- ・義務教育段階で身につけるべき基礎的・基本的な学習の確実な定着

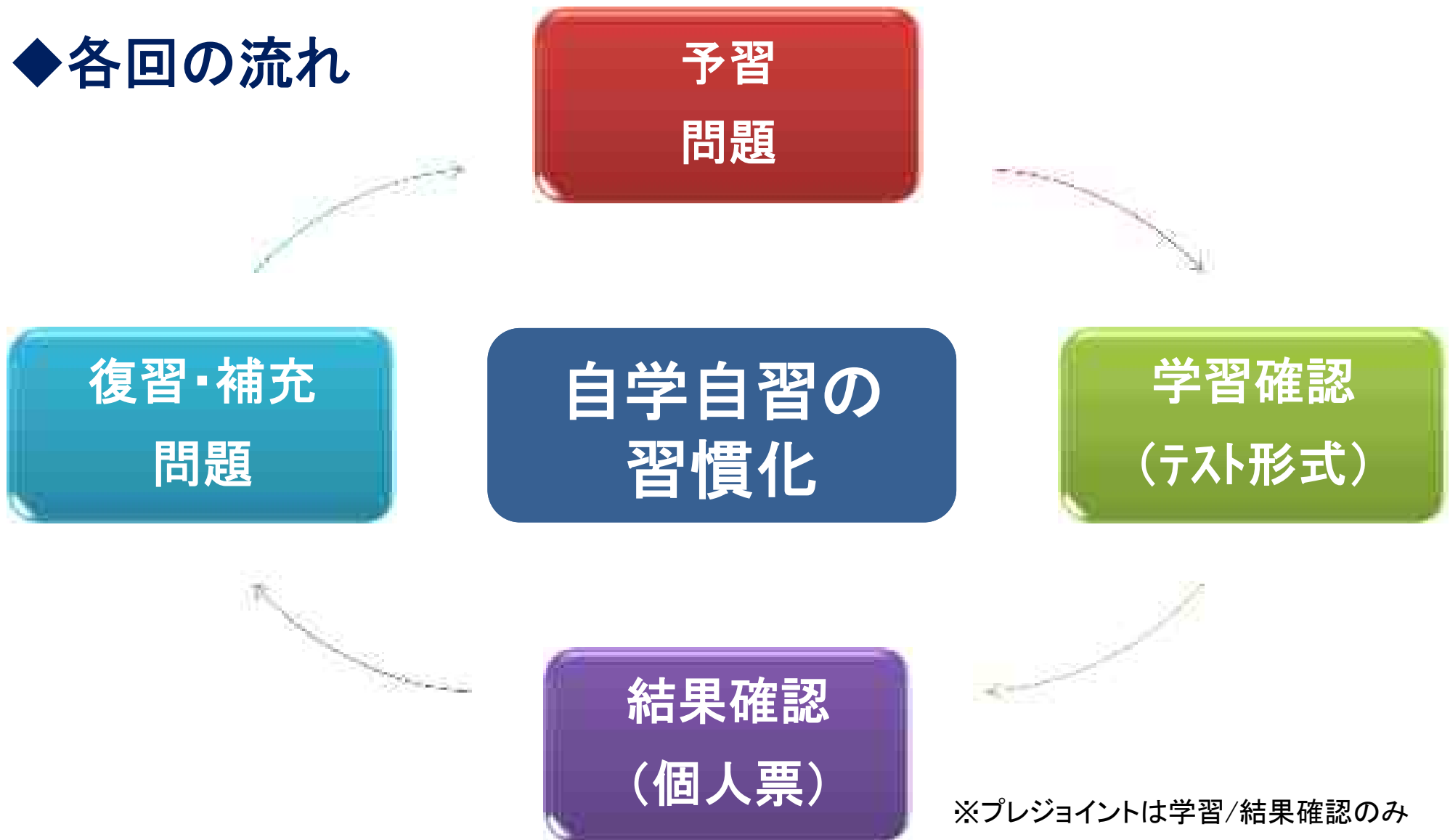
7 京都市学習支援プログラム

◆対象学年・回数



7 京都市学習支援プログラム

◆各回の流れ



7 京都市学習支援プログラム

◆各回の流れ(ジョイントプログラムの場合)

① 出題予定表を見て
出題範囲をチェックする。



→ ② おさらいプリント
を使って、確認テ
ストに向けて
学習を進める。



→ ③ 確認テス
ト後返却
された成績表
を見て、自分
の苦手なとこ
ろや得意なと
ころを把握す
る。

→ ④ ふり返しプリント
で、自分の苦手な
ところの復習や得意な
ところを伸ば
すための挑戦
をする。



7 京都市学習支援プログラム

◆京都市学習支援プログラムの効果①

・事前事後の学習の機会の増加

計画的な総復習の確認を行うことにより、事前事後の学習の機会を増やし、学習内容の定着を高めることができる。

・いち早く自己の学習状況等を把握

確認テスト直後に自己診断するだけでなく、25日後には個人データを受け取り、いち早く自己の学習状況と学ぶべき課題を全市との比較も含めて詳細に把握・自己分析することができる。

・フォローアップ教材（補充教材）

各回ごとの目標に即したフォローアップシート（補充教材）を活用して、弱点克服、さらにステップアップを目指す。

7 京都市学習支援プログラム

◆京都市学習支援プログラムの効果②

・小学校から中学校の学習スタイルに慣れる

事前学習，確認テスト，事後学習というサイクルを小学校時代に体験させることにより，中学校の学習スタイルにスムーズに移行。ジョイント・プログラムと学習確認プログラムの一貫性により，自学自習の習慣化を継続的に行う。

・小中学校間での情報の共有

ジョイント・プログラムの5回目を中1の4月に実施することにより中学校が早期に新入生の学力を把握。ジョイント・プログラム及び学習確認プログラムの情報を基にした小中合同研修会の実施。